

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00563

研究課題名(和文)未記述方言の形態統語論から見たサルデーニャ語の歴史的・類型論的研究

研究課題名(英文)A diachronic and typological study of Sardinian from a point of view of morphosyntax in undocumented dialects

研究代表者

金澤 雄介 (Kanazawa, Yusuke)

近畿大学・国際学部・准教授

研究者番号：70713288

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、古サルデーニャ語における形態統語論にまつわる諸問題について主に以下のことを主張した：(1) 使役構文は独立した2つの独立した節からなる。(2) 存在文の成立について、所有文および所在文におけるクリティック(proform)の文法化が関与している。(3) ログドーロ方言の非屈折不定詞は屈折不定詞よりも古くから存在しており、屈折不定詞は接続法半過去からの形態的影響によって二次的に生じた。一方カンピダーノ方言で屈折不定詞は観察されないのは、イタリア語との接触によって接続法半過去の形態は接続法大過去にとって代わられた結果である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロマンス諸語の類型論的研究では、主要なロマンス語のみが分析対象とされることが多い。本研究ではサルデーニャ語のような少数ロマンス語に目を向けることで、ロマンス諸語の通時的研究および類型論的研究の進展に寄与できたと思われる。また、サルデーニャ語研究は国内ではまだまだ発展途上にある。本研究成果の一部を日本国内で発表することで、サルデーニャ語研究の裾野をわずかながら広げることができた点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study mainly argued the following issues related to morphosyntax in Old Sardinian: (1) The causative construction consists of two independent clauses, (2) the grammaticalization of the clitic (proform) in possessive and locative sentences is involved in the formation of existential sentences, and (3) non-inflected infinitives in the Logudorese dialect are older than inflected infinitives, and inflected infinitives arose secondarily through morphological influence from the imperfect subjunctive. The absence of inflected infinitives in the Campidanese dialect, on the other hand, is the result of contact with Italian, in which the imperfect subjunctive was replaced by the pluperfect subjunctive.

研究分野：言語学

キーワード：サルデーニャ語 ロマンス諸語 歴史言語学 使役文 不定詞 存在文 イタリア語 形態統語論

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

サルデーニャ語は、イタリアのサルデーニャ島で話されるロマンス諸語のひとつである。話者は約 120 万人とされるが、その大半がイタリア語との 2 言語使用者であり、流暢に話せる話者はこれより少ない。サルデーニャ語には大別すると 2 つの方言、ログドローロ方言（島の北部～中央部）とカンピダーノ方言（南部）が存在する。現代サルデーニャ語のこの 2 大方言の形態統語論的研究は、Blasco Ferrer, Eduardo / Koch, Peter / Marzo, Daniela (eds.) (2017) *Manuale di linguistica sarda*, Berlin: Walter de Gruyter. の当該チャプター、Jones, Michael Allan (1993) *Sardinian Syntax*, London: Routledge. などがあり、共時的な観点から分析がおこなわれている。歴史的研究には Blasco Ferrer, Eduardo (1984) *Storia linguistica della Sardegna*, Tübingen: Max Niemeyer. のサルデーニャ語の通史、Blasco Ferrer, Eduardo (2003) *Crestomazia sarda dei primi secoli*, Nuoro: Ilisso. の文献学的研究などがある。また現代サルデーニャ語の類型論的研究に Putzu, Ignazio (ed.) (2005) *Sprachtypologie und Universalienforschung* 58, 2/3 (*Sardinian in typological perspective*) 所収の諸論文などがある。

上述の 2 つの方言はいくつかの下位方言に分類され、音韻・形態・統語面で多様な特徴が観察される。しかしながらこれらの諸方言の、とりわけ形態統語論の通時的变化については、十分な研究がおこなわれているとは言えない。また、これらの変化がロマンス諸語における(含意的)普遍性および多様性においてどのように位置づけられるか、つまり通時的变化の類型論的研究は手つかずのままである。ロマンス諸語の伝統的な分類においてサルデーニャ語は、イタリア語などと同じ東ロマンス諸語に分類されることもあれば、スペイン語などと同じ西ロマンス諸語に分類されることもあり、また独立した言語とみなす立場もある。研究代表者(金澤)は、未記述のサルデーニャ語方言を詳細に分析することで、系統的な親近性や地理的な隣接性ではとらえられない、この言語の歴史を特徴づける本質を見いだせると予測した。

以上の背景から、未記述の方言調査を出発点として、ほかのロマンス諸語の通時的变化との共通点および相違点を明らかにし、サルデーニャ語の形態統語論の通時的变化の類型を特徴づける要素は何であるかを解明することを本研究の「問い」と定めた。

2. 研究の目的

本研究では、未記述のサルデーニャ語方言の形態統語論の調査をもとに、その通時的变化を類型論の立場から考察し、ほかのロマンス諸語との共通点と相違点を明らかにする予定であった。しかしながら、新型コロナウイルスの影響で現代サルデーニャ語の現地調査を実施することができなかったため、研究期間全体を通して古サルデーニャ語における形態統語論にまつわる諸現象を考察の対象とした。具体的なトピックは以下の(1)～(4)である：

(1) 親族名詞における Differential Object Marking (DOM) と、有生性の階層の関係

サルデーニャ語には、特定の文法的特徴を持つ直接目的語が前置詞 *a(d)* によってマークされるという現象が観察される。このような現象は Differential Object Marking (以下 DOM) と呼ばれる。本研究では、古サルデーニャ語における、親族名詞における DOM の出現について記述した。そして DOM 付加に関わる有生性の階層は、名詞の数(単数/複数)によって異なることを示した。

(2) 使役文の構造

現代サルデーニャ語を含むロマンス諸語では使役動詞として主にラテン語の *facere, laxare* に由来する動詞が用いられる。一方、古サルデーニャ語では、ラテン語の *ponere* に由来する *ponnere* を使った使役構文が見られる。本研究では、古サルデーニャ語の使役文の構造について明らかにすることを目的とした。考察によって、使役文は 2 つの独立した節からなる (biclausal) 構造であることを示す。

(3) 存在文の形成過程

ロマンス諸語における所有文と存在文、所在文と存在文にはそれぞれ類似した構造が観察される。本研究の目的の 1 つは、所有文と存在文、および所在文と存在文に構造上の共通点を示すことである。古サルデーニャ語において、所有文あるいは所在文から存在文への再解釈の中間段階を示す構造、つまり存在文に必須の要素である *proform* をともなう所有文・所在文が観察されることを示す。2 つめの目的は、このような構造を根拠として、先行研究で主張されている存在文の成立過程の妥当性を裏付けることである。

(4) 屈折不定詞と非屈折不定詞の通時態

サルデーニャ語ログドローロ方言では、補文節における不定詞は主節の主語と異なる主語をとれない、補文の主語と一致する屈折語尾を持つことができる。このような不定詞は屈折不定詞と呼ばれる。一方、主節とは異なる主語をとまうが、明示的な屈折語尾を持たない不定詞も見ら

れる。このような不定詞を非屈折不定詞と呼ぶ。本研究の 1 つ目の目的は、ログドロー方言の屈折不定詞と人称不定詞の成立過程について通時的観点から考察を試みることである。一方、現代カンピダーノ方言では屈折不定詞は観察されないが、非屈折不定詞は存在する。本研究の 2 つ目の目的は、カンピダーノ方言における非屈折不定詞の形成について説明を与えることである。

(5) 「規定」を意味する非屈折不定詞と非従属節化

ロマンス諸語において、一般的に不定詞は主節の動詞に従属的に用いられる。11~13 世紀に教会で作成された古サルデーニャ語の文書(コンダグ)では、不定詞が単独であたかも主節の動詞としてふるまい、「規定(~すること / ~するように)」の意味を表す例が観察される。本研究では、このような不定詞の形態統語論的特徴について考察する。本研究では、「規定」を意味する不定詞は、非屈折不定詞と考えられることを示す。非屈折不定詞とは、明示的な主語をとまなうが、主語と一致する屈折語尾を持たない不定詞を指す。また、主節の動詞のようにふるまい、「規定」の意味を表す不定詞は、「非従属節化 (insubordination)」によって生じたことを示す。非従属節化とは、「形式的には従属節に見えるものの、慣習化された主節の用法」を意味する。

3. 研究の方法

本研究は、研究代表者(金澤)が作成した古サルデーニャ語文献の電子コーパスを資料として使用した。本研究で主に扱った古サルデーニャ語文献は以下の通りである：

Condaghe di San Pietro di Silki (ログドロー方言；11 世紀~13 世紀)

Condaghe di San Nicola di Trullas (ログドロー方言；1130 年~13 世紀)

Condaghe di Santa Maria di Bonarcado (ログドロー方言・カンピダーノ方言；12 世紀)

Carte Volgari Cagliaritanas (カンピダーノ方言；1070 年~1226 年)

Carta de Logu (カンピダーノ方言；14 世紀)

2020 年春から発生した新型コロナウイルスの影響で、研究期間全体を通して、当初予定していた現地での調査を実施することはできなかった。2023 年 3 月にカリアリ大学図書館等で文献調査を実施することができた。

また、研究を推進する上でサルデーニャ語の事例だけを考察の対象とするのではなく、できる限りほかのロマンス諸語の並行例との対照をおこなった。それによって本研究の成果をロマンス諸語の通時的類型論へ展開させることを意識した。

4. 研究成果

「研究の目的」の項で示した (1)~(5) それぞれの研究成果は次の通りである：

(1) 親族名詞における Differential object marking (DOM) と、有生性の階層の関係

親族名詞における DOM の出現について単数形では、親族名詞は有生名詞と区別され、より有生性の高い名詞として位置づけられる。一方複数形の親族名詞は、有生性の階層において有生名詞と同一の階層に置かれることを示した。本研究の結論として、DOM 付加における有生性の階層を図 1 のように図式化した：

Singular:

Pronouns > Proper names > Kinship terms > Animate nouns > Inanimate nouns
└──────────────────────────┘ └──────────────────────────┘
DOM Definite article

Plural:

Pronouns > Proper names > {Kinship terms / Animate nouns} > Inanimate nouns
└──────────────────────────┘ └──────────────────────────┘
DOM Definite article

図 1：DOM 付加における有生性の階層

(2) 使役文の構造

本研究では、古サルデーニャ語の使役文の構造は、2 つの独立した節からなる (biclausal) 構造、つまり使役動詞と不定詞の間に FP (Functional Phrase) が介在していることを示した。その根拠として次の 3 つの点を示した：(i) 不定詞は義務的に補文標識 a をともなうこと、(ii) 不定詞の目的語クリティックの主動詞への上昇 (climbing) が生じないこと、(iii) 不定詞の主語に先行する前置詞 a は Differential Object Marking であること。

(3) 存在文の成立過程

本研究では、古サルデーニャ語における所有文、所在文、存在文の構造について観察し、所有文と存在文、そして所在文と存在文の間には論理構造的な類似性が観察されることを示した。先行研究において、存在文は所有文および所在文における構造の再解釈、および場所を表すクリテ

イックにおける proform への文法化、存在文における「存在の主体」を空間と時間（今、ここ）に位置づける抽象的な項への変化によって成立したと主張されてきた。本研究では、古サルデーニャ語における、所有文と所在文に proform がともなう事例、所有文とも存在文とも解釈できる構文、また所在文とも存在文とも解釈できる構文を示し、先行研究が主張している存在文の成立過程の妥当性を支持した。ただし、proform は所有文における非明示的な所有者、所在文における非明示的な存在場所の代わりとして出現したのではなく、少なくともサルデーニャ語においては、再解釈のより古い段階、すなわち所有文と所在文の段階ですでに存在していたことを示唆した。

(4) 屈折不定詞と非屈折不定詞の通時態

本研究では、ログドーロ方言の通時的变化において、非屈折不定詞は屈折不定詞の語尾の省略によって生じたのではなく、屈折不定詞の出現よりも先に存在していたことを示した。屈折不定詞はより後に時代において接続法半過去からの形態的影響によって発生したと主張した。一方、カンピダーノ方言の接続法半過去は、イタリア語（トスカーナ方言）からの影響によってラテン語の接続法大過去に由来する形式にとって代わられた。つまり、古カンピダーノ方言でラテン語の接続法半過去の形態が失われたので、接続法半過去の語尾の影響が非屈折不定詞に現れなかった。その結果、現代カンピダーノ方言において屈折不定詞は存在せず、非屈折不定詞のみが観察されると結論づけた。

(5) 「規定」を意味する非屈折不定詞と非従属節化

本研究では、単独で主節の動詞のようにふるまう、「規定」を意味する不定詞は非屈折不定詞と考えられることを示した。その根拠として、非屈折不定詞に特徴的である、不定詞の主語が義務的に不定詞の後ろに置かれることを論じた。このような不定詞は本来、「～することを命じる」のような主節動詞によって支配されていた。この主節が省略された結果、従属節の不定詞が残され、あたかも主節の動詞のようにふるまうようになったと主張した。つまり「規定」を意味する不定詞は、「非従属節化」が起きていると結論づけた。この結論は、非従属節化を受けた不定詞が「規定」という意味に慣習化されていることによって支持される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Yusuke KANAZAWA	4. 巻 -
2. 論文標題 La costruzione causativa nel sardo antico	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Actes du XXIXe Congres International de Linguistique et de Philologie Romane	6. 最初と最後の頁 455-464
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yusuke Kanazawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Differential object marking in kinship terms and animacy hierarchies in Old Sardinian	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Differential Object Marking in Romance. Towards microvariation	6. 最初と最後の頁 250-262
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yusuke Kanazawa	4. 巻 1
2. 論文標題 Diacronia dell' infinito flessio e non-flessio nel sardo logudorese e campidanese	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Perspectives de recherche en linguistique et philologie romanes, Actes du XXXe Congres International de Linguistique et de Philologie Romane	6. 最初と最後の頁 161-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Yusuke KANAZAWA	4. 巻 6
2. 論文標題 The Historical Development of Existential Constructions in Old Sardinian	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of International Studies	6. 最初と最後の頁 59-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 KANAZAWA, yusuke	4. 巻 -
2. 論文標題 Uno studio contrastivo del raddoppiamento clitico nel sardo e nello spagnolo dal punto di vista del grado della grammaticalizzazione	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Eva Lavric, Christine Konecny, Carmen Konzett-Firth, Wolfgang Pockl, Monika Messner und Eduardo Jacinto Garcia (eds.) Comparatio delectat III, Peter Lang	6. 最初と最後の頁 153 - 162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 KANAZAWA, yusuke	4. 巻 -
2. 論文標題 La correlazione tra il raddoppiamento clitico e il cambiamento dell'ordine delle parole nel sardo	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Adam Alvah Catt, Ronald I. Kim, and Brent Vine (eds.) QAZZU warrai, Anatolian and Indo-European Studies in Honor of Kazuhiko Yoshida, Beech Stave Press	6. 最初と最後の頁 140 - 151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

[学会発表] 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Yusuke Kanazawa
2. 発表標題 Diacronia dell' infinito flessio e non-flessio nel sardo logudorese e campidanese
3. 学会等名 XXX Congreso Internacional de Linguística y Filología Romanicas (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金澤 雄介
2. 発表標題 古サルデーニャ語における「規定」を意味する不定詞と非従属節化
3. 学会等名 日本ロマンス語学会第 61 回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 金澤 雄介
2. 発表標題 古サルデーニャ語の条件文における不定詞についての試論
3. 学会等名 2021 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金澤 雄介
2. 発表標題 古サルデーニャ語における存在文の成立について
3. 学会等名 日本ロマンス語学会第58回大会（発表資料のみの提出）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KANAZAWA, Yusuke
2. 発表標題 La costruzione causativa nel sardo antico
3. 学会等名 29e Congres international de linguistique et philologie romanes (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>【書評】 Shigeaki Sugeta. Manuale di Linguistica Romanza (Romance Gengogaku Gairon) Tokyo: Waseda University Press, 2019, viii + 243pp, in: CONCORDIA DISCORS vs DISCORDIA CONCORS, Semanticity, Alterity, Creativity: Building on Eugenio Coseriu's Legacy 16 201-210 2021年</p>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------